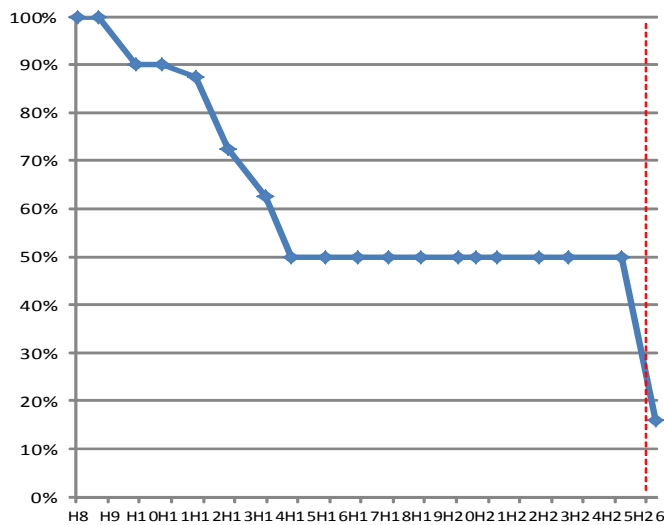


樹種名	ユリノキ（ハンテンボク）	
科 目	モクレン科	
学 名	<i>Liriodendron tulipifera</i>	
分 布	北アメリカ中部原産であり、日本へは明治時代初期に渡来した。原産地では樹高が50mを超えるものもある。	
樹木特性	ユリノキ（百合の木）は、モクレン科ユリノキ属の落葉高木である。別名にハンテンボク（半纏木；葉の形が半纏に似ることから）、レンゲボク（蓮華木；花が蓮の花を思わせることから）、チューリップツリー（同じく花がチューリップを思わせることから。種小名と同じ発想）などとも呼ぶ。	
用 途	街路樹、公園樹、建築・器具材として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	200 本／0.06ha (約 3,500 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 樹皮は、若木では平滑だが、のちに不規則な裂け目ができて灰黒褐色になる。葉は互生し、葉は 6~15cm で、はんとんに似た形に 4~6 裂する。主脈の先端が、裂片の凹部になるのが特徴的。この葉の形から、ヤッコダコノキ、グンバイノキとも言う。開花は、5~6 月頃、枝先に直径 6cm 程度のチューリップに似た形で、付け根はオレンジ色の斑紋のある淡い黄緑色をしている。現在では、景観的にも美しいことから、高木の街路樹として植えられている。	
試験地での様子	普通苗を植栽し、植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生し、襲来した台風により、材質の低下が起因と思われる倒木・折損の被害も発生している。 植栽から 18 年が経過し、現存率は 16 %と低い結果であるが、現存する樹木の平均樹高は 20m 程度で、成長量（上長・肥大ともに）は大きい。	 
被 害	植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。 (延べ駆除本数：9 本)	

ユリノキ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生して枯死したものや、コウモリガ等により材質の低下や、襲来した台風等により折損や倒木が発生した。平成 15 年度以降の枯死は見られない。

林内の照度調整を図るため平成 21 年度に本数調整伐を実施した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 16.0%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

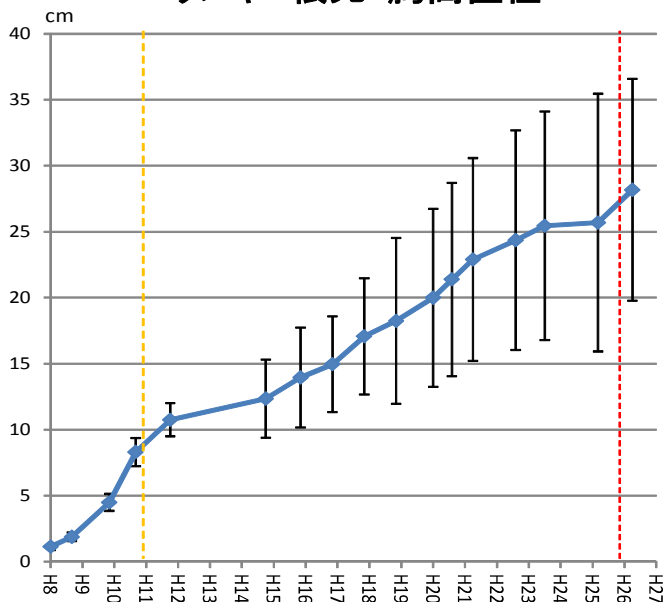
良好な成長を示している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 28.18 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ユリノキ 根元・胸高直径



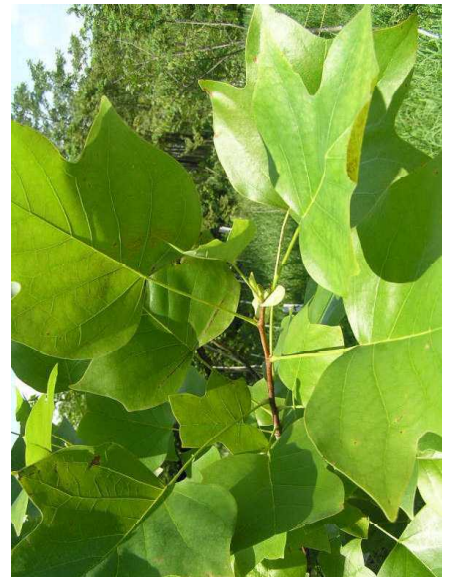
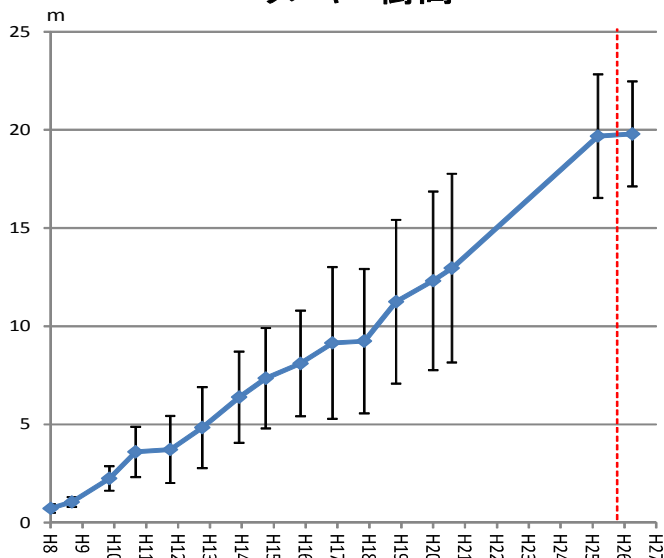
【樹 高】

上長成長は旺盛で、良好な成長を示している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 19.69m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ユリノキ 樹高



《プチ情報》

種小名(*tulipifera*)は「チューリップ(のような花)をつける」の意味である。

明治 8、9 年頃渡来した 30 粒の種から育った 1 本の苗木から明治 14 年に東京国立博物館に植えられたといわれ、以来博物館の歴史を見守り続けている。東京国立博物館は「ユリノキの博物館」「ユリノキの館」などといわれる。